

「弾き歌い」での音楽表現による感性と感覚

表現からの視点で捉える読譜力

長澤 雅恵*

Sensibility + Feeling of Musical Expression as One Sings to Ones Own Accompaniment The Ability to Read Music, Captured from Expressive Point of View

Masae NAGASAWA

はじめに

幼稚園教育要領の基本的なねらいの中のひとつに「豊かな感性の育み」という観点がある。それは子どもが持っている力（感性）を引き出し、心に思い描いているイメージを子どもの思うままに表出させられるよう、感性を育てることがねらいである。

「子どもの感性を豊かに」と考えると、指導者（保育者）が音楽に対して、感性豊かな表現者であるべきことは、必然であり大切なことである。

そこで、情操教育のひとつである「弾き歌い」を通して、音楽体験の有無にとらわれず、学生たちの音楽表現をより豊かにさせるために、どのようにしたらよいか。感性の育成に役立てる方法を考察することにした。

1 「弾き歌い」とは

一般に「弾き歌い」とは、その言葉通り「歌」と「楽器」を同時に演奏することである。

「楽器」は「歌」を補うための伴奏の役割である。その種類は幅広いが、ピアノ、オルガン、電子ピアノ、ギター、打楽器などがあげられる。実際の教育現場では、ピアノなどの鍵盤楽器が主流である。そして、「弾き歌い」は「歌」と「楽器」を同時に演奏することによって、より表情豊かな演奏が可能になり、相乗効果がより期待できる。そのためには、「弾き歌い」は表現力の育成には、無くてはならない方法の一つであると考えられる。

2 「表現」の指導点

「表現」とは、内面的、主観的なものを形に表すことである。今回は音楽における「表現」として捉えると、言語そのものも表現になるが、言語が示すものの意味や内容を直接表すものではなく、人間の感覚に直接触れるもの、訴えるものと捉える。また、音楽における「表現」

* 非常勤講師

は、対象である。

弾き歌いのレッスン時に与えられた課題曲に対し、何を感じ、どう表現するかを必ず学生に聞く。学生のほとんどは言葉に詰まり、ただ譜面を見て練習をしていく程度といった場合が大半である。

「弾き歌い」は、既述した通り「歌」と「楽器」を同時に演奏することである。「歌」がなにより重要なのは言うまでもない。言語が示す歌詞の意味を考え、そこから感じとった感覚（イメージ）をピアノに乗せて表現することが求められる。何もイメージが無いまま「弾き歌い」をすることは、とてもできない。

まず始めに「あめふりくまのこ」¹⁾の歌詞から考える。

1) 歌詞から感じとる表現

1～5番までの歌詞の意味をよく読み、細かく情景や状況を考えてみる。これを「詩」というより「物語」として捉えると、起承転結がはっきりと読み取れる。まるで、かわいらしい光景の紙芝居を見ているような、とてもやさしい雰囲気を感じとれる。

「あめふりくまのこ」¹⁾ (作詞、鶴見正夫)

- | | | |
|---|--|---|
| 1 | おやまにあめがふりました

あとからあとからふってきて

ちよろちよろおがわができました | ←物語の始まり。
これから始まる物語に期待感を持たせる。 |
| 2 | いたずらくまのこかけてきて

そつとのぞいてみました

さかながいるかとみました | ←かわいらしく楽しく元気な様子。

←魚が逃げてしまわないように、やさしく見守る様子。 |
| 3 | なんにもいないとくまのこは

おみずをひとくちのみました

おててですくってのみました | ←魚がいないことで、さみしさを表す。
何もない残念さと、つまらない様子。 |
| 4 | それでもどこかにいるようで

もいちどのぞいてみました

さかなをまちまちみました | ←期待感があり、魚が来るかと待っている時間も楽しい様子。 |

5 なかなかやまないあめでした
 かさでもかぶっていきましょうと
 あたまにはっぱをのせました

←物語の終り。
 全体の世界観をイメージして、のんびり
 愛情あふれるやさしい様子。

2) 楽譜から感じとる表現

歌詞から感じとったイメージを踏まえて、楽譜から更にイメージが広がるように読譜してみる。譜例1の楽譜、速度記号の個所に「やさしく話しかけるように」とあり、全体的にのんびり

譜例1 (作曲、湯山昭)

♩=108 やさしく話しかけるように 3連音符を使うことで、視野が広がるイメージ。 1オクターブ高くなることで、明るく楽しさを表す。

タッカ(符点)のリズム。
 かわいらしくくまのこの足音。

同音でのタッカ(符音)のリズムは、くまのこの幼い感じを表す。
 1番の歌詞「あとから あとから」の部分は、雨が降りやまない感じを表す。

tenuto(その音を保って)は、少しおさえる感覚で演奏することによって、1つの区切り、解決するように終結する。

雨音を表現する。

Coda

りと愛情あふれるやさしさ、かわいらしさを主に表現できることがうかがわれる。また楽譜を見ると、タッカ(符点)のリズムで旋律が作られているため、くまの子のあいらしい仕草や、情景、雨の降っている様子など、符点の揺れを感じながら演奏できるとまとまりやすくなる。

3番の後に間奏が入るが、3番が全体的にさみしさを表しているので、piano(弱く)から演奏し、4番の歌詞を考えて、crescend(段々強く)から大きく広がり感を表現する。

始めはまったくイメージがわからず、何も感じられず、言葉で表現することができなかった学生も、歌詞の内容から状況を考え、風景を考えていくうちに、どういった気持ちになるのかを細かく想像して、イメージを言葉で形にする、という表現が自然にできるようになっていった。まずは、自分なりのイメージをきちんと言葉で表現できるようにすることが、「弾き歌い」での表現の第一歩と考えられる。

次に、言葉で表現できるようになったら、音に乗せて「歌」と「楽器」で表現してみる。譜例2「ぞうさん」の二つの異なった楽譜から、表現の違いによって、楽譜をどのように選択するか考えてみたい。

3) 二種類の楽譜による異なった表現

譜例2 (作詞、まどみちお 作曲、團伊玖磨)

A

Andantino ♩ = 84~88

1. ぞ う さん ぞ う さん お は な が な が い の ね
2. ぞ う さん ぞ う さん だ ー れ が す き な ー の

ぞ う よ か あ さん も な が い の よ
あ の ね か あ さん が す き な の

上記に掲げたAの楽譜は、後のBの楽譜と比較してみると、簡潔になっていて、大変弾きやすくなっていることが確かめられる。具体的に、Aは右手の旋律が「歌」とまったく同じになっており、左手は単旋律のみで、和音などは使われていない。そのため、音数が少なく簡潔になっている。それに対しBは、右手の旋律は「歌」とは異なった旋律になっており、右、左手ともに和音を使って音数が多くなっている。

Aの楽譜の前奏の部分が、二段目の旋律の問いかけに対し、答える形になっているため、のんびり穏やかな表現が考えられる。音数が少ないため世界観が狭く、ゾウの親子、単体のイメージを表すことができる。よって、Aの楽譜の場合は、全体的にすっきりと、爽快感を感じるように演奏をすることが望ましい。

B

Andantino ♩ = 81~88

1. ぞうさん ぞうさん おはながながいのね
2. ぞうさん ぞうさん だーれがすきなーの

そーうよ かあさん も な が い の よ
のあ かあさん が す き な の よ

一方、Bの楽譜の前奏は、左手で「ぞうさん」の旋律を演奏することによって、ゾウの大きさ、重さを表し、右手は、穏やかな中にも楽しさ、うれしさを表す。音数が増えることによって音に厚みができ、曲全体に広がりができるため、世界観が広がり、何頭ものゾウの親子がいるように、全体的にゆっくりとした広大さ、楽しさを表現している。

譜例2、A、Bの楽譜に、「Andantino」²⁾と表記されている。この楽語は「ややゆっくりと」と意味が記されているが、おそい速度なのか、はやい速度なのか意見が一致しておらず、曖昧な表記になっている。この「ぞうさん」では、全体的にゆったり、のんびり、落ち着いた雰囲気演奏することが望まれる。なぜなら、「ゾウ」のイメージから、とても大きく、重たく、おっとりしている、といったことが思い描かれるためである。

そして、4分の3拍子であることから、3カウントを円形に捉え、ゆったり大きな円をイメージすることによって、穏やかな雰囲気が表現できる。1拍目にアクセントをつけることによって、ゾウの大きさ、重さが表現できる。

学生に「ぞうさん」の表現を聞くと、

- 1 母子が、動物園にゾウを見に行き、ゾウの様子を見ながら母子が仲良く会話をしている様子。

2 草原に、野生のゾウの親子が、仲良く食事をしながらのんびり日向ぼっこをしている様子。

3 子ゾウが母親ゾウに甘えて、仲良く楽しそうに会話をしている様子。

などの意見がでた。1の母子が動物園でゾウを見るといった狭い空間を表す場合、Aの楽譜の方が、より表現しやすいと考えられる。これに対し、2の草原での野生のゾウは、広い大地のイメージで、むしろ、Bの楽譜の方が表現しやすい。一方、3のゾウの親子は、A、Bどちらの楽譜でも表現しやすいだろう。

既述した学生の意見を見ても、「ぞうさん」は、とても情景描写がわかりやすく表現できていると思われるが、そこから先につなげることが難しいようだ。母子が仲良く会話をしている様子から、楽しいのか、うれしいのか、にぎやかなのか、静かなのか、など具体的な心情、感情を考え、強弱や緩急などを使って表現できると、より全体にわかりやすく、演奏しやすくなると考えられる。

また、学生に譜例2のA、Bの楽譜を選択させると、ほとんどの学生は簡潔になっているAを選ぶ。その理由は「簡単だから」である。音楽経験の浅い学生などは、それも重要な理由の一つになるが、「ぞうさん」をどう表現したいかを先に考えるべきである。その上で、自分に合った(能力に合った)表現ができる楽譜を選択し、より自分のイメージが聴き手に伝わりやすいように、編曲をするのも大事なことである。

今回取り上げた楽曲は、いずれも比較的表現しやすい題材を選択したため、学生も作品に入り込みやすく、どのように表現したらいいか理解しやすかったようである。

ただ、どんな状況を表現したいのか、どのように表現したいのかを明確にしたからといって、それぞれ個々で、感じ方、受け取り方は違ってくるため、聴き手に伝わるかは別問題である。表現者(指導者、保育者)は、少しでも表現したいものを、受け取る側に感じとってもらうため、創意工夫が必ず必要な条件として求められる。

3 まとめ

豊かな感性を育むということは、音楽の本質である。「感性」とは、何かしらの印象を直感的に感じ取り、その感じとった感性を表に現すことが「感覚」である。

手で触れることができない実体のない「音」で表現するということは、指導者(保育者)の感覚性、感受性に頼るものが多い。そのため個々の学生が、音楽だけでなく日々の生活から視野を広げ、常に素直な気持ちで、新しい感覚に刺激を受ける努力をしてほしいものだ。そうすることによって表現の幅はより広がり、大きな表現体となるに相違ない。

注¹⁾ 小林美実「こどものうた200」チャイルド本社2004年P133

²⁾ 浅香淳「新音楽辞典」音楽之友社1980年 P26

引用楽譜・参考文献

譜例1 南曜子 今村方子 今川恭子「心を育む子どもの歌」教育芸術社2011年 P63

譜例2 井戸和秀「こどものうた100」チャイルド本社2009年 P198・199

深見友紀子「子どものうた弾き歌いベスト50」音楽之友社2011年

教師養成研究会・幼児教育部会「幼児の音楽リズム」学芸図書(株)1964年